



後藤さんは1951年、トラピスト修道院で有名な北海道上磯郡上磯町生まれ。実家が牧場を営んでいるため、雄大な自然に囲まれ、鐘の音が朝の訪れを知らせるといふ牧歌色豊かな少年時代を送った。

医学・理学を修め、フランスなどでの留学を経て大学で熱帯病や感染症の教員を務めていた後藤さんがビジネス界へ転じたのは、アフリカ滞在中に3度マラリアにかかったこと



菅沼晃文学部教授の著作『サンスクリット語の理論と実践』であった。

東洋大学入学のために九州から東京に移り生命保険業界に転職し、二部文学部2年に編入した。「印度哲学を専攻し、本当によく勉強しました。卒業して10年経ちますが、いまでも当時の友人たちとはつながりがあります」となつかしむ。印度哲学科で指導教授の森章司先生から学んだ、「常識にとらわれないもの

扱う、いわば保険会社が加入する保険を指す。

何も無いところからGCR日本支社を大きな成功に導いた後藤さんは、日本人の大手・安定志向に釘を刺す。「どうしたら顧客に喜んでもらえるか、よく利益をあげられるか、いつも考えています。これからさらに成長していこうという会社だから、(社員は)放っておいても仕事を

あると同時に大学院の院生でもあり、顧客は常に新しい情報を求めており、そうした需要に対応するためにはいるんなものを吸収し、自分の持つ能力を増やしていくことが不可欠、という考えからだ。「これからは大企業よりも中小企業でより多く稼ぐ社員が増えていくでしょうね。大手であることはあまり意味がなくなるでしょう。自分の能力をいかに発揮できるかが大切になってくると思います」。後藤さんはそう断言する。

後藤牧人氏(平成5年二部印度哲学科卒)は、ドイツに本拠を置く世界第3位の再保険会社、ジェネラル・コロン・リー(GCR)のジェネラルマネージャーとして日本支社をゼロから立ち上げ、現在10人のスタッフで年間数十億規模の売上を誇るまでに成長させた経営手腕の持ち主だ。これまで医学・理学をはじめ経営情報学など、いくつもの大学・大学院で資格も取得しているという氏の経歴は彩りに溢れていて実にユニーク。「考える力は東洋大で学んだことが多い。考える人に不可能はないんです」と力強く語る後藤氏に、東洋大学への想い、在学生へのメッセージなどを語ってもらった。

がきつかけだった。

「残りの人生は拾いもの。生きて日本に帰ったら前から興味があった仏教を勉強しよう」と選んだのが東洋大学だった。かつて留学中にヨーロッパ人から仏教とはなにか、とよく聞かれうまく答えられなかったことや、以前から興味があり日本から持参してジャングルのテントの中で読んでいたサンスクリットの文献のことが頭にあった。期せずして、それは

方』はその後のビジネスにおいて非常に役に立っているという。印度哲学はそれまで氏が学んだ中で唯一仕事には直接結びつかない分野だった。しかし、印度哲学科で毎日深く考える習慣を身につけたことにより、それまで学んできた医学・理学などの点と点とが結びついた。

再保険とは、数億円規模の多額の保険案件や日本の保険会社では引き受けられない臓器移植などの保険を

ない。かつて大手企業にいた安定志向の人ほどだめですね」。部下に対する注文は非常に厳しい。有名大学を卒業した若い男性社員でも、「まるで使えない者も多い」とバツサリ。「いわれたことはやるがそれ以上のことはやらない、というのではダメなんです。自分の仕事は自分で見つけてこないと」。部下に厳しく求める以上、自分にも厳しいノルマを課す。現在、医科大学の非常勤講師で

東洋大学は、後藤さんが学んだ多くの大学の中で一番印象に残っているというだけあって、在学生への評価も「印象がうすい気がします。もっと自信を持つことが必要です」と手厳しい。「東洋大生は謙虚すぎやしませんか?哲学する人にはこわいものはないんですよ!」後藤さんはそういうと豪快に笑った。